

被害を与えた際の受け止め方の変化 — 周囲の反応の影響についての検討 —

藤野京子 (早稲田大学)

キーワード：罪悪感、羞恥心、逃避

犯罪者の中には、犯罪行為をしている最中は特段何も思わず、その行為で捕まって、初めて悪いことをしたと実感したと語る者がいる一方、その行為を周囲から責められ、頑なに自己弁護する者も観察される。そこで、本研究では、人に被害を与えた出来事を取り上げ、その出来事をめぐっての周囲の反応によって、罪悪感等がどのように変容するかを検討することを目的とした。

方 法

成人 600 名 (男女 300 名ずつ、年齢 22~89 歳、平均年齢 50.39 歳) に「対人観についての調査」と題したインターネット調査を、調査会社を介して 2017 年 10 月に無記名自記式で実施した。

調査では、罪悪感を抱く可能性がある以下の 2 つのエピソードに自身が立ち会ったとして、どのように受け止めるかを回答するよう求めた。

エピソード A：あなたのためにと知人の口ききで、有力者を紹介してもらったのに、その有力者との面談で、有力者の機嫌を損ねた。

エピソード B：無理に貸してもらった知人の大事な品を、鍵をかけて保管していたつもりでいたが、なくなっていることに気づいた。

それぞれのエピソードについて、その出来事に遭遇した当初の段階 (段階 1)、その出来事を自身が知人に報告する前に、そのことを知った知人が平静心を失っているところを目の当たりにした段階 (段階 2)、そのことが周りに知れて、自身が笑い者になった段階 (段階 3)、出来事の終結段階 (段階 4)、の 4 段階それぞれについて、その際に抱く可能性がある感情・認知 10 項目を測定した。

段階 4 の出来事の終結段階については、知人が自身を許してくれる (終結 1)、知人が自身を責めてくる (終結 2)、事態改善案を思いつく (終結 3)、の 3 群を設け、上記調査協力者を 200 名 (男女 100 名ずつ) ずつ割り振って、回答を求めた。

結 果

各エピソードの各段階で測定した感情・認知 10 項目について、因子分析を行ったところ、罪悪感、自己嫌悪感、羞恥心、逃避、閉口感の 5 因子に分かれることが確認できた。それぞれの感情・認知同士の関連は Table1 に示したとおりである。

各エピソードの段階 1~3 の上記感情・認知の平均値は Table2 のとおりである。反復測定による分散分析を行ったところ、エピソード A の閉口感を除き、段

階間に有意差が認められた。また、段階 4 の終結種類別の感情・認知は Table3 のとおりである。各感情・認知について段階 3 の該当感情・認知を共変量として、終結種類についての分散分析を行った結果、エピソード A の羞恥心を除き、種類間に有意差が認められた。

Table 1 感情・認知得点同士の関連

	自己嫌悪感	逃避	羞恥心	閉口感
罪悪感	.73	.37	.59	.69
自己嫌悪感		.56	.76	.76
逃避			.70	.52
羞恥心				.69

数値は Pearson の相関係数を示す

Table2 段階ごとの感情・認知得点の変化

段階	エピソード A				エピソード B			
	1	2	3	多重比較	1	2	3	多重比較
罪悪感	2.75	3.17	2.42	3<1<2	4.41	4.47	3.88	3<1<2
自己嫌悪感	2.08	2.19	2.18	1<3,2	3.43	3.48	3.18	3<1<2
逃避	2.61	2.53	2.71	2<1<3	2.57	2.61	2.72	1,2<3
羞恥心	2.32	2.36	2.64	1<2<3	2.95	3.02	3.14	1<2<3
閉口感	2.67	2.67	2.60		3.68	3.64	3.38	2,1<3

Bonferroni の多重比較の結果、有意差があった群同士をくで示している

Table 3 段階4の終結種類別感情・認知得点

終結種類	エピソード A				エピソード B			
	1	2	3	多重比較	1	2	3	多重比較
罪悪感	3.07	3.29	2.59	3<1,2	4.43	4.47	4.13	3<1,2
自己嫌悪感	2.13	2.35	1.98	3<1<2	3.40	3.49	3.01	3<1<2
逃避	2.57	2.66	2.39	3<1,2	2.58	2.71	2.53	3<2
羞恥心	2.33	2.40	2.22		3.23	3.06	2.84	3<2,1
閉口感	2.37	2.85	2.20	3,1<2	3.44	3.72	2.95	3<1<2

Bonferroni の多重比較の結果、有意差があった群同士をくで示している

考 察

自身が人に被害を与えたとして、その行為自体は変わらなくても、その事態の展開の仕方によって、感情・認知が揺れ動くことが確認できた。たとえば、罪悪感には、被害を与えた事象が発生したときよりも、それによって他者が困ってしまっている場面を目の当たりにした方が強くなること、反対に、そのことで自身が周囲から疎外されたり中傷されたりすると弱まることが示された。また、その事態改善を自身が図れそうと思う場合には罪悪感が弱いこと、被害を受けた者が許容してくれる場合の方がくれない場合に比べて、自己嫌悪感や閉口感が弱いことが示された。

付 記

本研究は科研基盤 C15K04151 の助成に基づいて行われた。